

## **恵みとまことに満ちて**

ヨハネの福音書 1章 14-18節

### **はじめに**

月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。1：1-18は、「ヨハネの福音書」の序文に当たる部分で、イエス様がどのような方かについて書かれています。これまでイエス様は、「ことば」とか「光」と呼ばれてきましたけれど、今日の聖書箇所ですら、この「ことば」とか「光」と呼ばれた方が、イエス様のことだということがはっきりします。

### **1. 父のひとり子**

14節を見てみましょう。「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。**」

「ことば」というのは、1：1に出てきました。「**初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。**」。「ことば」は、初めから存在し、神とともにあり、神である方のことです。そして1：3には、「**すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない**」とあります。「ことば」は、初めから存在する世界の創造者であり、神でありつつ、神と区別される方です。ヨハネは、人となられる前のイエス様のことを、「ことば」と呼んでいるのです。

イエス様は、神でありつつ、父なる神様とは区別された方です。ですから、「父のみもとから来られたひとり子」と呼ばれています。聖書は、神はただひとりしかおられず、その神は父、子、聖霊という三つの人格を持つ三位一体の神だと教えています。そして、この三位一体の神様は、初めから存在し、世界と人間を造られた創造者だと教えています。

イエス様は、「父のみもとから来られたひとり子」と呼ばれ、18節では「**父のふところにおられるひとり子の神**」と呼ばれています。イエス様は、神でありつつ、父なる神様の「ひとり子」です。「ひとり子」というのは、「一人っ子」のことであり、「唯一の子ども」という意味です。イエス様を「ひとり子」と呼ぶのは、「ヨハネの福音書」と「ヨハネの手紙」だけです。

「ヨハネの福音書」では、3：16に「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである**」とあります。また「ヨハネの手紙第一」では、4：9に「**神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって、私たちにいのちを得させてくださいました。それによって、神の愛が私たちに示されたのです**」

とあります。ヨハネが、イエス様を「ひとり子」と呼ぶのは、神様の愛の大きさを示すためだと思います。神様は、私たちに永遠のいのちを与えるために、「ひとりっ子」であり、「唯一の子ども」を犠牲になさった、「ひとりっ子」であり、「唯一の子ども」を犠牲にするほど、神様は私たちを愛してくださったと言うのです。「一人っ子」また「唯一の子ども」は、その親にとって、かけがえのない存在です。ヨハネは、イエス様を「ひとり子」と呼ぶことによって、神様が私たちの救いのために払ってくださった犠牲がいかに大きいか、神様がいかに大切なものを私たちに与えてくださったか、神様の私たちに対する愛がいかに深いかを示そうとしているのではないのでしょうか。神様にとってイエス様は、かけがえのない存在です。唯一無二の存在です。

しかし、1：12-13にはこういう言葉がありました。「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである**」。神様にとって、イエス様は「一人っ子」であり「唯一の子ども」です。しかし神様は、イエス様を神と信じ、また救い主と信じる人を、「神の子ども」としてくださると言うのです。しかも単なる養子ではなく、新しく「神の子ども」として生まれさせてくださると言うのです。そして、神様の愛と守りの中で育てられ、時には懲らしめを受けて訓練され、最終的には神様のすべての祝福をイエス様と共に「共同相続人」として相続するのです。

イエス様を信じる私たちは、イエス様と共に「神の子ども」とされるのです。しかしイエス様と私たちが決定的に違うのは、イエス様は永遠に神の子どもであるということです。私たちは時至って「神の子ども」とされますけれど、イエス様は「初めから」「永遠に」「神の子ども」なのです。その意味でイエス様は、唯一無二の「ひとり子」なのです。神様は、私たちを御自身の「子ども」とするために、唯一無二の「ひとり子」を犠牲にされたのです。

## 2. 恵みとまことに満ちて

イエス様は、神の「ひとり子」であると同時に、「恵みとまこと」に満ちておられました。「恵みとまこと」というのは、「まことの恵み」「本当の恵み」とも言えます。16節には、「**私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた**」とあります。イエス様は、尽きない恵みを持っておられます。イエス様は恵みに満たされているので、いくらでも私たちに恵みを与えることができます。イエス様は、恵みの泉のような方です。私たちは、イエス様から恵みを汲んでも汲んでも、決して尽きることはないのです。イエス様の恵みは、決して枯れることはないのです。ですからイエス様は、こう言われました。「**わたしが与える水を飲む人は、いつでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます**」(ヨハネ 4:14)。「**だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります**」(ヨハネ 7:37-38)。

イエス様から与えられる恵みは、一度きりのものではありません。イエス様を信じた時だ

けのものではありません。私たちは、生涯の終わりまで、「恵みの上にさらに恵みを受けて」歩いていくのです。私たち人間は限りある存在です。誰かを無限に支えることはできません。誰かに依存されたり、誰かに全存在をかけて寄りかかれた時、必ず疲れ果ててしまいます。しかしイエス様は、恵みに満ちた方で、尽きない恵みを持っておられる方です。私たちが頼るべき方はイエス様です。私たちがいくら頼っても、イエス様は決して倒れることはありません。尽きない恵みで、私たちを最後まで支えてくださるのです。

17節には、「**律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである**」とあります。モーセは私たちに律法を与え、イエス様は私たちに恵みとまことを与えてくださるのです。「律法」とは、神様が私たちに求めておられることです。その中心は、神様を愛し、隣人を愛することです。しかし、私たち人間は、神様の律法を完全に守ることはできません。アダムとエバが神様の命令に背いて以来、私たち人間は罪の性質を持っているからです。律法だけでは、私たちは自分の罪深さを知ることしかできません。自分の愚かさ、惨めさを知ることしかできないのです。律法は、神様が私たちに求めておられることを教えてくれる良いものです。しかし律法だけでは、私たちは救われないのです。

イエス様は、私たちに恵みとまことを与えてくださいました。神様の律法を完全に守ることができない私たちを救うために、イエス様が私たちの代わりに、神様の律法を完全に守ってくださいましたのです。そして、神様の律法を完全に守ることができなかった私たちの罰を、イエス様が十字架において代わりに受けてくださったのです。私たちは、律法だけでは救われないのです。恵みとまことがなければ、決して救われないのです。

律法は、神様を愛すること、隣人を愛することを、私たちに教えています。一方、イエス様は恵みとまことを通して、神様が私たちを愛していることを教えているのです。律法は私たちに、愛することを教え、イエス様は私たちに、愛されていることを教えてくれるのです。愛することも愛されることも、私たちは両方必要なのです。しかし私たちが聖書から教えられることは、愛されることで愛することができるようになるということです。Ⅰヨハネ4：19にはこうあります。「**私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです**」。

律法は、尊いものです。しかし律法は、私たちを変える力はありません。私たちを愛する者へと変えるのは、イエス様だけです。イエス様への信仰が私たちを変えるのです。イエス様を信じて、「神様の子ども」として新しく生まれる時、私たちは神様を愛し、隣人を愛する者へと変えられるのです。

### 3. 神を説き明かす

18節を見てみましょう。「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである**」。イエス様は、神様を説き明かす方です。神様は霊ですから、誰も神様を見たことはありません。しかしイエス様を見れば、神様がどういう方が分かるというのです。イエス様は、こう言われました。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。あなたがたがわ**

**たしを知っているなら、わたしの父をも知るようになります。今から父を知るのです。いや、すでにあなたがたは父を見たのです」(ヨハネ 14:6-7)。**神様は、イエス様を通して御自身を現わされま  
す。ですから私たちは、イエス様を通して神様を知るのです。それが、私たちが神様を知る  
道筋です。

キリスト教は、イエス様を通して神様を知る宗教と言えます。一方、ユダヤ教は、イエス  
様を神と認めませんから、イエス様を通して神様を知ることはしません。むしろ律法を通し  
て、神様を知る宗教と言えるかもしれません。私たちは、イエス様を通して、神様という方  
が、恵みとまことに満ちておられる方であることを知ることができたのです。神様は決して、  
私たちに神様を愛し、隣人を愛することだけを求める方ではない、神様はそれらを私たちに  
求めつつも、私たちが愛してくださる方であることを、イエス様は私たちに教えてくださ  
ったのです。イエス様はそれを、言葉だけではなく、御自身のいのちをかけて、私たちに教え  
てくださったのです。

私たちは、イエス様を通して神様を見なければなりません。イエス様というフィルターを  
通して、イエス様という眼鏡を通して、神様を見なければなりません。イエス様を通して神  
様を見る時、神様という方がはっきりと見えてくるのです。

## **おわりに**

私たちは、イエス様を通して、神様が恵みとまことに満ちておられる方であることを知る  
ようになります。私たちは、イエス様を神と信じ、私たちの救い主と信じる時、神様の子ど  
もとされ、恵みの上に恵みを受ける人生を歩むようになるのです。私たちは、イエス様を信  
じる時、私たちが本当に頼るべき方を持つようになるのです。

最後に、15節を見てみましょう。「**ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。『私の後に  
来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のこと  
です**」。私たちは、先にイエス様を知った者として、バプテスマのヨハネと共に、イエス様を  
証ししなければなりません。イエス様がどういう方であることを、私たちも人々に証しなけれ  
ばなりません。

すべての人は、神という人間を越えた大きな存在がいるという漠然とした感覚を持って  
います。しかしその神という方が、どういう方であることを知らないのです。それゆえ人間は、  
偶像を造ったり、人間や動物や自然を神として拝んだりしてしまうのです。また世俗化した  
社会の中では、財産や地位や名誉などを神のように求めるようになるのです。

イエス様は私たちに、まことの神がどういう方であることを私たちに教えてくださる方  
です。そして私たちが、本当に頼るべき存在は何かを教えてくださいます。

それゆえ私たちは、イエス様を証しするのです。この方こそ、まことの神であり、恵みと  
まことに満ちた、私たちが頼るべき唯一の方であることを証しするのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされたひとり子イエス様は、まことの神でありつつ、神を説き明かされる方です。私たちはイエス様を通して、あなたが恵みとまことに満ちておられる方であることを知りました。またあなたがいかに私たちを愛してくださっているかを知りました。

私たちは、あなたの恵みに頼り、あなたを証しして生きていきます。どうかすべての人が、まことの神様を見いたすことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。